

学習者の読みの構えを育成する国語科授業 ーテキストの〈語り〉を読み解くことを問題としてー

井上 泰

テキストの「読み」の対象を、テキストの開く「問題領域」(テキストの問いかけ)とテキストの「見方・考え方」(テキストの呼びかけ)との2つに区分し、学習者にその2つを区分する「構え」を身につけさせることをねらいとした授業の中で、いくつかの課題が見えてきた。その一つが、学習者の読み方の問題である。理解の難しいテキストに出会ったとき、学習者はテキストの〈語り〉を無視して、自分の主体化している観念で読んでしまう。では、国語科授業においていかにしてその問題を解決していくことができるか。本稿では、2015年度1学期に、中学1年生122名を対象に行った学習の実践を報告する。

1. はじめに

稿者は、テキストの「読み」の対象を、テキストの開く「問題領域」(テキストの問いかけ)とテキストの「見方・考え方」(テキストの呼びかけ)との2つに区分し、学習者にその2つを区分する「構え」を身につけさせることをねらいとして日々の授業を行っている。その中で、読みの構えを身につけさせるための課題がいくつか見えてきた。その一つが、学習者の読み方の問題である。学習者はしばしばテキストの〈語り〉＝〈表現〉を読まずに、自分の主体化している観念でもってテキストを読んでしまう。その傾向は、物語文であれば、描写の読み解きにくい文章に特に見られる。学習者は読み解きにくい物語と出会ったときに理解の難しい描写を無視して、道徳的な読みをしたり、教訓を読み取ったりして理解したつもりになってしまう¹⁾。読みの構えを身につけさせていく上で、テキストが何を問題(「問題領域」)として、その問題についてどのように答えよう(「見方・考え方」)としているのかを読み取ろうとすることは大切なことである。では、学習者がテキストの〈語り〉を無視してしまうという問題を解決するためには、どのような学習が有効だろうか。その答えはいくつかあるだろうが、その一つとして、テキストの〈語り〉を丁寧に読み解いていく練習を繰り返し行うということがある。安易に物語を理解せず、テキストの〈語り〉に敏感になって読み解いていくこと、そうした姿勢をまずは育むことが大切であろう。稿者は、上述した問題意識のもと、2015年度1学期、中学1年生122名を対象に、あえてテキストの〈語り〉が読み解きにくいテキストを教材として選び、テキストの〈語り〉を読み解く学習を繰り返し行った。本稿は、その実践の報告である。

2. 「風のゆうれい」の学習

テリー・ジョーンズ「風のゆうれい」²⁾は、デイヴィットとジョナサンの友人二人が、運試しの旅に出るお話

である。旅の道中には、大きな川、深い谷、海といった行く手を阻むものがある。その傍には、順におばあさん、おじいさん、水夫がおり、渡り方を尋ねる2人に2つの方法を答える。例えば、大きな川では、おばあさんが、自分で泳いで渡るか、船頭の望むものを渡すかわりに舟で渡してもらうかの2つの方向を答える。デイヴィッドは船頭が何を欲しがるかかわからないので泳いで行く方法を選び、ジョナサンは濡れるのが嫌なので、舟で渡してもらうという方法を選ぶ。デイヴィッドは無事に泳ぎ着き、一方ジョナサンは、月を欲しがった船頭に、コップで川の水をすくい月を映しだして渡すことで、船頭の要求に応える。2つ目の難関である深い谷を渡った2人は海に出る。そこには水夫がおり、水夫に渡り方を尋ねると、あらしや高波、怪物のいる危険な海を舟で渡るか、魔法使いの言うことを聞いて魔法で渡してもらうかのどちらかだと答える。デイヴィッドは魔法使いの言うことを聞くのが嫌だと言って舟で渡る方を選び、ジョナサンは魔法で渡してもらう方を選ぶ。デイヴィッドは、海の危険と戦いながらなんとか舟で渡り、粉屋になって幸せに暮らす。一方、ジョナサンは魔法使いの風をつかまえるという要望に応えようとしたが、風をつかまえられず、とうとう風のゆうれいになってしまった。そして、物語は次のように終わる。

けれどもジョナサンは、風をつかまえることができませんでした。それでいまでも風を追いかけているのです。嵐の最中に風が一瞬やんだようなとき、パタパタという足音が聞こえるはずです。風をつかまえることも休むこともできないジョナサンは、風のゆうれいになってしまったのです。そして、わたしは、それはそれできっと幸せなのだと思いますよ。

物語の最後はジョナサンを「幸せ」だという語り手の言葉で終わる。だが、ジョナサンは、風のゆうれいになってしまった。なのに、語り手はなぜ「幸せ」と言うのか。その理由は語られておらず、読者に考えさせるよう

な終わり方になっている。では、語り手の語る「幸せ」とは何だろうか。海を渡ったデイヴィッドは、次のように語られている。

デイヴィッドはそこに風車を建て、羽を風でまわしてもらって、粉屋になりました。お金持ちにはなれませんでした。食べるものには困らず、わたしの知るかぎり、デイヴィッドは幸せに暮らしました。ここで注目されるのは、「羽を風でまわしてもらって」という言い方である。もちろん、風車は風で羽をまわしてもらわなければならない。しかし、ここではそのような意味を伝えるためだけに、このように言っているのだろうか。ジョナサンは、風のゆうれいになっている。語り手のこのような語り方は、デイヴィッドは、ジョナサンに羽を「まわしてもらって」「幸せに暮らし」ているという読みを誘発する。そう考えると、ジョナサンの「幸せ」とは、友人のデイヴィッドの「幸せ」を支えることができることということになる。

では、学習者は本話をどのように読んだのか。次に初読の感想を見てみたい。

○初読の感想の分析

以下感想を分析する。感想は大きく4つに分類できた。なお、傍線は、学習者が読みとった事柄、点線は読む際に学習者が注目した記述や踏まえた内容が分かる箇所に付している。

①最後の〈語り〉を踏まえ、教訓を読み取る感想

私は、「風のゆうれい」を読んでまじめにこつこつとやっていたら、時間がかかっても、最後はこつこつやってきた人が得をするんだと分かりました。

安全な方法で旅をしていたデイヴィッドは、時間がかかったけど、最後には幸せになることができましたが、危険な方法を選んだジョナサンはゆうれいになってしまいました。

私はデイヴィッドのように、遠回りでも、安全な道を選んでいきたいなと思いました。そうすればきつと近道よりも早くつくこともあると思います。だから私はこつこつやっていきたいと思います。

②教訓(諺)で理解しようとするものの、最後の〈語り〉に違和感を覚え、考えようとする感想

ジョナサンとデイヴィッドの性格が真逆だということ、この文章は「楽な道と苦しい道があれば苦しい道を選ぶ。そうすればいつか良いことがおこる」という「楽あれば苦あり、苦あれば楽あり」を表しているのかと思った。しかし最後の「わたしは、それはそれできつと幸せなのだと思いますよ。」というところがなぜ幸せだと思うのかが、疑問に思うので、そこを考えていきたい。

③最後の〈語り〉を疑問に思いながらも、教訓を読み取る感想

私はこの話を読んで不思議に思ったことが一つあります。それは、何故、作者はジョナサンが幸せだと思うのかということ。きつと私なら、風のゆうれいになってしまったら、自分を不幸だと思うと思います。なぜなら、もう風を追いかけることしかならないからです。

でも、しばらく考え、分かったことがあります。作者が伝えたかったこと、それはゴールに向かって走り続けることができるなら、どんなにゴールが遠くても、幸せだということ。

学習者の多くは、①と②にあるように、2人の性格や考え方の違い、そしてそれに応じた結果から、教訓や諺を読み取っている。特に①からは「はじめに」で述べたように、学習者が理解しがたい描写を無視して物語を理解しようとしているのがよく分かる。その一方で、②、③は、最後の語り手の〈語り〉に注目しているが、その答えを自分では出し切れていない。また、③にみられるように、その答えを物語全体から考えていくのではなく、手持ちの観念で答えを出しているというのも、読みの問題として重大な点である。

さて、授業では、初読の感想をプリントにまとめ、配布し、以下の手順で物語を読み直した。

- 1 教訓や諺で解釈している感想を取り上げ、それで物語が理解できているか問う。
- 2 最後の〈語り〉に疑問をもっている感想を取り上げ、教訓や諺では理解しきれない部分があることを確認し、その疑問にどう答えるかを考えていくことを伝える。
- 3 他の疑問も取り上げながら、物語全体を読み直す。

最後の〈語り〉以外に次のような疑問があったので、それらを確認した。特に疑問④については、学習者に風のつかまえ方を問い、答えさせた上で、知恵者のジョナサンはどうして風をつかまえられなかったのかを考えていった。

疑問① 2人の関係について

ジョナサンとデイヴィッドは考え方が正反対なのにどうして仲が良いのかが不思議でした。

疑問② 魔法使いはなぜこれまでのことを知っており、そしてなぜ風を「簡単に」つかまえられると聞いたのか。

わたしは「風のゆうれい」を読んで、疑問に思ったことが二つあります。一つ目は、月をくれてやったり、真冬に夏のお日さまがどこにいるかを知っている者なら、なぜ簡単に風をつかまえられるかということです。魔法使いの考えに疑問を持ちました。

疑問③ デイヴィッドの職業について(=風に関わる職業を選んだのはなぜか)

なぜデイヴィッドは粉屋になったのかという事です。他にもいい仕事があるはずなのになぜ粉屋を選んだのか不明で

す。

疑問④ 風のつかまえ方について。そして、ジョナサンは風をつかまえられなかったのか、つかまえなかったのかについて。

ジョナサンはただ、風を追いかけて、つかまえようとしたのですが、デイヴィッドは船を動かすときに風に動かしてもらっていて、風車の羽を風に動かしてもらっています。なので、デイヴィッドはある意味、風をつかまえていたのではないかと思います。ジョナサンも、そのようなやり方で風をつかまえればよかったのではないかと思います。

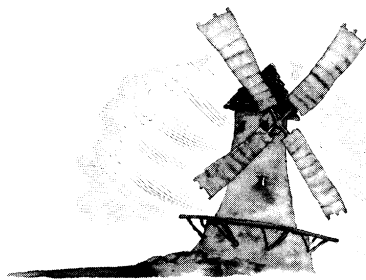
ジョナサンは月をくれてやったり、真冬に夏のお日さまを見つける方法を教えたりと、頭が良いと思うのに、なぜ風をつかまえるときに、頭がはたらかなかったのかと思います。

4 「羽を風でまわしてもらって」に注目し、語り手のいう〈幸せ〉について考える

上述の疑問を確認し、特に疑問④を考えていくなかで、ジョナサンが風をつかまえるとデイヴィッドが舟で海を渡れなくなるので、もしかしたらつかまえなかったのかかもしれないという意見が出された。そして、この意見を踏まえて、もう一度語り手の言う「幸せ」を本文に注目して考えるように伝えた。すると学習者は、「羽を風でまわしてもらって」に注目して、ジョナサンはデイヴィッドを助けているから「幸せ」だと語り手が言っているのではないかと考えることができた。

5 挿絵に注目し、他者の読みを確認

最後に挿絵に注目し、挿絵から制作者の読みを考えた。風車に風がよりそうように描かれている。挿絵は風車と



風をよりそうように描くことで2人の関係や語り手の語る「幸せ」を語りだしている。今回は、挿絵は最後に注目したが、手順「3」の前に挿絵を読み解くことで、本文を読み直す活動もできるだろう。

以上のような手順で読み直しをしていき、語り手の考える「幸せ」について考えていった。

3. 「空中ブランコ乗りのキキ」の学習

「風のゆうれい」を読み終えて、次に別役実「空中ブランコ乗りのキキ」の学習を行った。本話は、サーカスで一番の人気者である空中ブランコ乗りのキキのお話で

ある。お客さんからの拍手(=人気)が何もよりも大事なキキは、誰かが3回宙返りをして自分の人気が落ちてしまうことを恐れ、難しい4回宙返りを練習するも成功しない。ある日、波止場で出会ったおばあさんから、金星サーカスの空中ブランコ乗りのピピが3回宙返りを成功させたこと、そしてその評判を書いた新聞が直にこの町にも届くだろうことを知らされる。キキに4回宙返りをする決心を読み取ったおばあさんは、お客さんから大きな拍手をもらいたいたげのために死ぬのかと問う。キキは「そうです。」と答える。するとおばあさんは「澄んだ青い水の入った小瓶」を渡し、飛ぶ前に飲むように言う。次の日キキはおばあさんに言われたように小瓶の水を飲み演技する。はたして4回宙返りは成功したのだが、物語は次のように終わる。

人々のどよめきが、潮鳴りのように町中を揺るがして、その古い港町を久しぶりに活気づけました。人々はみんな思わず涙を流しながら、辺りにいる人々と、肩をたたき合いました。でもその時、だれも気づかなかったのですが、キキはもうどこにもいなかったのです。お客さんがみんな満足して帰ったあと、がらんとしたテントの中を、団長さんを初め、サーカス中の人々が必死になって捜し回ったのですが、むだでした。翌朝、サーカスの大テントのてっぺんに白い大きな鳥が止まっていた、それが悲しそうに鳴きながら、海のほうへと飛んで行ったと言います。もしかしたらそれがキキだったのかもしれないと、町の人々はうわさしておりました。

「白い大きな鳥」が「悲しそうに鳴きながら」飛んで行ったとある。「白い大きな鳥」がキキだとすれば、なぜ「悲しそう」だったのか。その疑問を、語り手は読者に考えさせようとしている。

キキの悲しみを考える上で重要な記述は、キキの演技後にあるだろう。お客の大きな歓声のあと、「でもその時、だれも気づかなかったのですが、キキはもうどこにもいなかったのです。お客さんがみんな満足して帰ったあと」とあって、お客さんの大技には感動するものの、キキ自体には無関心な態度が語られる。この町の人々の演者に関心をもたずに技にだけ感動する姿は、例えば波止場でのおばあさんの言葉、「お客さんは、それじゃ練習さえすれば、だれにでもできるんじゃないかな、って考え始めるよ。」や、キキが4回宙返りに挑戦するという広告の看板をみたときの町の人々の描写、「町の人々は、一斉に口をつぐんでしまいました。そしてその看板を見たあと、ピピのことを口にする者はだれもいなくなりました。」など、本文では繰り返し語られている。つまり、語り手はキキの生き方を批判的にみて、キキの後悔を語ることで、読者にキキの生き方について批判的に

考えさせようとしているのである。

では、学習者は本話をどのように読んだのか。次に初読の感想を見てみたい。

○初読の感想の分析

初読の感想で多かったのは、キキを称揚する感想である。

①キキを称揚する感想

1 私はキキはとても心の優しい人だなと思いました。自分の命を犠牲にしてまで、お客さんを楽しませたいというキキの強い意志が、薬のおかげだけでなく、その気持ちがあったからこそ、成功したのだと思います

2 命をかけてまで大きな拍手をもらいたくて、拍手をもらえないと空中ブランコをする意味がないとまで考えているキキのブランコ乗りとしての気持ちの強さにとても感動しました。そこまでしてやりたいことがあるキキはすごいと思いました。

一方で、このお話をキキの生き方を称揚するものとしてではなく、最後の場面に注目して、生き方を後悔するお話として読もうとしているものも少ないがあった。

②最後の〈語り〉に注目している感想

最後の場面で「大テントのてっぺんに白い大きな鳥が止まっていて、それが悲しそうに鳴きながら、海のほうへ飛んで行った」とあるため、キキは最後に後悔したのかなと思いました。

キキの後悔の理由については、いくつかあったが、一つは、薬を飲んで成功させたことへの後悔である。

私が思うにキキは「4回転宙返りを自分の力でやれたかった」という心残りがあったんだと思います。

こうした読み取りは、最後の場面に注目しているものの、他者の評価にこだわりすぎて自分の命を落としてしまうというキキの生き方への批判という立場からの回答ではない。むしろ超越的な力(薬)に頼るのではなく、自分の力(努力)だけでやることは素晴らしいといった道徳的な考えからの回答である。また、キキが鳥になったことから、人間ではなくなったことに後悔していると理解しているものもあった。

これは僕の意見ですが、キキは鳥になってから「人として生きる」ということの大切さ・素晴らしさに気づいたのだと思います。

このように学習者は最後の場面に疑問をもちながらも、物語全体を踏まえて、答えを導くことができていない。

こうした初読をふまえて、授業では以下の手順で物語を読み直した。

1 キキを称揚している感想を取り上げ、それで物語が理解できているか問う。

2 疑問を書いている感想を取り上げる。また、それに対する回答も紹介する。

3 「白い大きな鳥」がキキであろうことを本文から確認し、なぜ「悲しそう」だったのかを考える。その際に、本文の記述を踏まえて考えること、また話し合いをさせることを通して考えさせていった。

実際の授業では、1、2までは学習者の理解は順調に進んだ。だが、3でなぜ「悲しそう」だったかを考える際に、本文の記述を踏まえてという指示をしても、なかなか考えにくそうであった。補助発問として、「4回宙返りをするということは、キキはその時点では思いは変わっていない。でも、飛んだ後で後悔している。では、その間に何があったのか。キキは何を見たのだろうか。」というように、演技後の描写に注目させていった。すると、少数ではあるが学習者の方から、キキがいなくなったことに誰も気づいてないこと、特に観客はいなくなったことに最後まで気づかず帰っていることに注目し、自分の存在に無関心な観客の姿をキキは見たのではないかというような意見が出た。続けて授業者から、それまでは観客はどのように描かれているだろうかと発問し、観客の大技には感動するけれども演者には関心をもっていない姿について確認していった。

以上のように読み直し、語り手のキキの生き方に対する批判を読み取り、それについて考えていった。

続けて佐野洋子「一〇〇万回生きたねこ」を読んだ。本話は、それまで生き返っていた「ねこ」が「白いねこ」と生きたときだけは、生き返らなかつたというお話で、この話も理由が明確に語られずに終わり、読者に考えさせる語り方である。そして、この学習を終えて、学習者に「風のゆうれい」、「空中ブランコ乗りのキキ」、「一〇〇万回生きたねこ」を読んだまとめを、特にテーマは定めずに書かせた。そのまとめのなかから、〈語り〉を読み解くことに関して書かれたものを紹介する。

○まとめ

① 今まで読んだ三作品は、すべて命や生きかたをテーマにした作品でした。「風のゆうれい」では、ジョナサンとデイヴィッドの友情を、「空中ブランコ乗りのキキ」では、キキや白い鳥の思い、「一〇〇万回生きたねこ」ではねこにとっての「生」とは何かを考えてきました。この三つの作品を読んで語り手が読者に考えてほしいことは、すぐに見つかるものではなく、「答え」と言える部分もまた、すぐには分かりませんでした。でも、何度も読んでいくことで、「語り手が言いたいことは何か」「何を伝えたいのか」をじっくりと考えることができる作品でした。結論はすぐに出さず、文の中のヒントから考えることができる、「深い」作品だったと思います。また、人として考えるべきこと、「感情や命や『生きる』こと」について考えさせられる、語り手の思いがみえてくる作品でした。

②三作品で共通していることは、作者が読者に「幸せ」とはどういうものかを伝えようとしている所だと思います。「風のゆうれい」では友人を支え、助けること、「空中ブランコ乗りのキキ」では技や技術だけでなく人物にも思いやりを持つこと、「一〇〇万回生きたねこ」では、人を思いやり、生活を充実させることです。しかし、どの作品もそのことを直接書いていません。作品の中の言葉や表現を読み取り、考えないと分かりません。だから、私はこの三作品の学習をして、作品をじっくり読んで、直接は書かれていないけれど、作品の裏に隠された、作者の思いや考えを感じることが大切だと気づくことができました。自分で読みながら、疑問点や気づきなどを考えながら読むと、作者の思いが見えてくると思います。

ここで注目しておきたいのは、傍線部にあるように、簡単に作品を読んでしまうのではなく、「結論はすぐに出さず、文の中のヒントから考えること」、「作品の中の言葉や表現を読み取り、考え」ること、「自分で読みながら、疑問点や気づきなどを考え」ることの大切さに言及していることである。また、テキストの向こうに、語る主体を読み取り、そうした主体（「語り手」や「作者」）の「考え」や「思い」を読み取ろうという姿勢もうかがえる。この点も読みの構えを身につけさせていくには重要なことである。

以上のことから、「はじめに」で述べたように、あえて〈語り〉の読み解きにくいテキストを教材として選び、初読の感想から出発して、その〈語り〉を読み解く学習を繰り返し行うことは、テキストの〈語り〉を無視して自分の主体化している観念に逃げるのではなく、テキストの〈語り〉をしっかりと読み解こうとする姿勢を育むことに有効だといえるだろう。

4. 「愛のサーカス」の学習

上述の学習を行った後で、これまでの学習を踏まえて、初読の段階で、自分でどれだけ読めるかを問うことを一つのねらいとして、別役実「愛のサーカス」の学習を行った。本話は、ある港街に流れ着いたいかだに乗っていた少年と象を、埠頭事務所のウルじいさんと街の人々が、愛情をかけて世話をしていく話である。ただ、話の結末は、読者の想像のつかないもので、ある日、突然、金星サーカス団長（「紳士」）のクグが現れ、サーカスの見物料をもらいに来たという。啞然とするウルじいさんや街の人々に対し、団長は、街の人々は少年を見て感動した、そしてそれが愛のサーカスだったという。続けて団長はフィナーレだといって、黒い箱馬車から「少年の母親らしき若い美しい婦人」を登場させる。すると少年の顔に、

「これまでに人々が見たどれよりも大きな喜びが、華やかに広がって、そのまま母親の手の中に飛び込み」、それを見た街の人々は、「思わず涙を流し、声をあげ」、それが「大歓声になって、拍手になって」いった。そして、物語は次のように終わる。

金星サーカスの紳士は集まった人々からたっぷりと見物料をせしめ、少年と象を箱馬車に手荒く追い込み、逃げられないように外から大きな鍵をがちゃんとかけると、そのままいずこへともなく、走り去っていきました。

街の人々は、団長の「愛のサーカス」という言葉に啞然としながらも、フィナーレを終えて見物料を払っている。ここには、語り手の、安易に〈感動〉して見物料（お金）を払ってしまう街の人々の愚かさへの批判が見て取れる。では、この話を学習者はどのように読んだのか。

○初読の感想の分析

初読の感想には大きく四種類あった。一つ目は、街の人々を感動させた愛のサーカスへの賞賛。二つ目は、少年に愛情深く接した街の人々への賞賛。三つ目は、少年を金儲けのために利用した団長への批判である。

①興行への賞賛

この物語は愛のつまったとてもいい話だと思いました。確かにサーカスのすごい技を見るよりも普通の生活の中での感動の方が大きいと思いました。

②街の人々への賞賛

見知らぬ少年と象を親切に、食事を出したり、寝るところを作ってくれたりし、そして少年の気持ちに共感してくれていた、港がある街の人々たちは、とても優しいなと思いました。

③団長への批判

団長さんの言った通り、たしかに「少年の純真な魂」ほど感動できるものはほかにないと思います。しかし、それを自分のお金儲けのために利用しているのは、良くないことです。

ただし、物語の最後に注目し物語を読もうとする感想もいくつかあった。

④物語の結末に違和感を覚えている感想

- 1 これはいいお話だと思ったけど、最後がやはりしっくりきませんでした。
- 2 金星サーカスの紳士(クグ)はなぜ最後、あんなに乱暴したのか疑問です。ピビが少しかわいそうでした。母親から引き離されて、その上クグには乱暴な扱いを受けているからです。これにも何か大きな意味があるのでしょうか。
- 3 フィナーレでは少年の母親らしい人が出てきます。そのことにみんな涙しているけれど、最後に「見物料をせしめ…手荒く追い込み…」と強く書いてあるのはなぜだろうと思いました。

1の「やはり」や2の「これにも」という言葉には、

本話の書き手が「空中ブランコ乗りのキキ」と同じ別役実であることが念頭にあるのだろう。3の「強く書いてある」は、文章の向こうに書き手がいるということを念頭においた感想である。同じ作者の文章を読むという条件はあるが、学習者のなかに、疑問を大切に読むという姿勢や文章の向こうにいる書き手や語り手を意識して読むという姿勢を確認することができた。

授業では、やはり初読の感想を確認した後で、愛のサーカスのカラクリから〈感動〉について、そして街の人々が見物物を払っている点について考えていき、まとめとして物語全体のメッセージを考えていった。

5. まとめ

1学期には、このあとウルフ＝スタルク「シェーク vs. バナナ－スプリット」を学習した。本話も、物語の最後で読者の予想を裏切るもので、その点に学習者がどれだけこだわって読めるかを見るものとして設定した。したがって、1学期には、疑問や違和感の残る物語文を読み、初読の感想を書き、その感想をもとに読み直しをしていくという学習を繰り返し行った。もちろん授業では、テキストの〈語り〉を読み解くだけでなく、作品ごとに、テキストの開く「問題領域」とテキストの「見方・考え方」を考えさせ、テキストと対話させていった。

以上が、2015年度の1学期に、中学1年生を対象として行った授業の報告である。最後に、学習者の書いた1学期のまとめを紹介する。

○1学期のまとめ

①物語の表面だけを読み取るだけでなく、その文章に隠された著者や作者の思いや願いを考えるとすることを授業中にしていた。なぜ、そうしたのか。どうして、こんな書き方をしたのか。そんなことを考えていくうちに、最初に物語を読んだ後に感じた感想とは別の、物語への感想ができていて、考える事は大切だと感じたことが多かった。

②私は、国語の授業で物語を深読みすることを学んだ気がします。疑問に思うことは実際たくさんあるけれど、なかなか答えを見つけずになっていました。しかし、文章の一部から主人公の性格、理由などたくさんのがたったそれだけで分かってしまいます。以前まではその一部を見つけることができないまま放置することが多々あったけれどそれができると物語が2倍も、3倍も面白く、楽しく読めるようになったと思いました。

以上のようなまとめから、1学期の学習を通して、学習者には、初読の疑問や違和感をないがしろにせず、むしろそれを解決していく方向でテキストを読んでいくことの意義や「楽しさ」を実感させることができ

たとえる。一方で、テキストに向き合わず、簡単に手持ちの観念で文章を読んでしまう学習者はまだまだ多い。しかし、テキストの〈語り〉を読み解くことにこだわった学習を続けることで、学習者の読み方の力をつけて、読みの構えを身につけさせていきたい。

ところで、現行の学習指導要領では、学習者の知識を「活用する力」(思考力、判断力、表現力)の育成が重視されている。『言語活動の充実に関する指導事例集【中学校版】』(平成24年、文科省)では、「報告」「紹介」「説明」「発表」「スピーチ」「朗読」「文章と図表を関連して読む」「感想を交流」「批評する文章を書く」「比較して読み、書く」「物語や文章を批評する」等の言語活動を中心とした単元が、学習指導要領を踏まえて具体的に示されている。「活用」力を育成するのに、「活用」の場を設定し、そこで練習していくのはもっともなことであるが、はたして「言語活動の充実」だけを考えていけばいいのだろうか。学習者がテキストをどのように読み、何を知識化するのかといったことをまずは問題にしなければならぬのではないだろうか。知識が違えば「活用」自体も違ってくる。「活用する力」を育成する上でも、テキストの〈語り〉を読み解く力は重要となってくるのではないだろうか。

注

※1 村山太郎「学習者とテキストとの出会い」(『中等教育 研究紀要』第51巻、広島大学附属福山中・高等学校、2011年3月)では、この問題について詳細に論じられている。

※2 「風のゆうれい」の分析や学習については、山口眞琴「風のゆうれい」を読む―物語教材とヒューマニズム―(『Problematic ―プロブレマティーク―』Ⅱ〈文学／教育2〉、22～35頁、2001)を参考にした。

依拠本文

○「風のゆうれい」…『風のゆうれい』(テリー・ジョーンズ童話集、リブリオ出版、1990)

○「空中ブランコ乗りのキキ」…『山猫理髪店』(1979、三一書房)

○「愛のサーカス」…『山猫理髪店』(1979、三一書房)

○「シェーク vs. バナナ－スプリット」…『中学校国語1』(学校図書)